

資料

直接対面しない共同制作のプロセスの記録

野呂 祐人

Documenting the process of non-face-to-face co-creation

Yuto NORO

函館短期大学紀要

第49号

2022年3月

【資料】

直接対面しない共同制作のプロセスの記録

野呂 祐人

Documenting the process of non-face-to-face co-creation

Yuto NORO

本資料は、福祉施設とアーティストが共同で作品を作る「TASC ぎふコラボ展」で行われた、直接対面せずに郵送で作品を作るプロジェクト「そうぞうのパッケージ」における制作記録をまとめたものである。言語によるコミュニケーションが困難な人が参加する本プロジェクトにおいて、特性や肩書きといった立場の違う人同士の関係性づくりを見直すため、個人の属性に捉われずに共同制作する手法として直接対面せずに見ず知らずの状態での共同制作を行ってきた。その共同制作で起きた造形物と人々の変化を本資料に整理しまとめる。

キーワード：アート、コミュニケーション、障がい者芸術、共同制作

1. はじめに

本資料は、2020年10月、2021年10月に開催された展覧会であるTASC ぎふコラボ展「そうぞうのパッケージ」にて発表をした造形作品の制作プロセスの記録である。TASC ぎふ（岐阜県障がい者芸術文化支援センター）が主催する「TASC ぎふコラボ展」は福祉施設とアーティストがチームを組み、関係性づくりや作品制作、展示までを行う企画展だ。アーティストと障がい者がアートを通じてコミュニケーションを図り、社会との関わりを築く場として始まった企画である。筆者は6回目となる2020年にアーティストとして、7回目となる2021年に監修として関わり、2年に渡り「そうぞうのパッケージ」と題してプロジェクトの企画を行ってきた。

「そうぞうのパッケージ」は直接対面をせずに郵送で段ボール箱を送り合い、段ボール箱の内部に造形を重ねていくことで作品を共同制作するプロジェクトである。プロジェクトの目的の1つは、身体的特徴や性別や肩書きといった個人の属性の印象に捉われずに誰かと関わりを持つことである。それを達成するために見ず知らずの人同士が時間と空間を切り離して共同制作をする手法を取った。

そして、このプロジェクトは言語によるコミュ

ニケーションを取ることに困難を抱えている人たちが参加できることを前提としている。共同制作を通じて、障がいのある人々に現代社会に適応するために自立の支援をするのではなく、「自分の起こした行動に反応をもらう」「人と関わることで新しいものが生まれる」「他者の行動に触発される」といった、人と人が関わる本来の楽しさや喜びを、造形行為を通じて感じることをもう1つの目的としている。



Fig. 1. 2020年の展覧会の様子 (撮影:TERAMAKI)



Fig. 2. 制作の様子(撮影:TERAMAKI)



Fig. 3. 作品の郵送の様子(撮影:TERAMAKI)

また、筆者は共同制作におけるコミュニケーションと創造性をテーマに、造形ワークショップの開発と実施をしている。そのワークショップの一つである、言葉のやり取りをせず共同制作をする《モノトーク・シリーズ》の考え方が今回の共同制作のベースとなっている。《モノトーク・シリーズ》では、「会話をしない」「交互に造形を付け足す」という2つのルールで共同制作を行う。そして参加者は、言葉による明確な意思疎通から距離を置き、造形物を通したやりとりで人とのつながりができていく体験をする。そこには「誤読」や「ズレ」といった意思疎通を目的としない非言語コミュニケーションが発生し、その特殊なコミュニケーションを体験することがワークショップの目的となる。反対に、言語のやりとりが難しい人と関係性を築く時にも《モノトーク・シリーズ》の手法が有効だと考え、「そうぞうのパッケージ」に転用をした。

プロジェクトを終え、①新型コロナウイルス感

染症（COVID-19）の流行による対面が難しい状況下で行う共同制作の事例、②コミュニケーションに不自由を抱える人との関係性づくりの事例、という2つの観点から制作の記録を公開する意義を感じ、本資料を通してプロジェクトで起きた共同制作の実践の整理をする。以下、2020年に開催した「そうぞうのパッケージ」、2021年に開催した「そうぞうのパッケージ2」の事例を紹介する。

2. 2020年「そうぞうのパッケージ」の記録

(1) プロジェクトについて

筆者が所属する「コココ（アートワークショップユニット）」と「福祉作業所 豊住園（社会福祉法人瑞穂市社会福祉協議会）」から1人ずつ出て2人組を2組つくり、それぞれで共同制作をし、2つの造形作品を制作した。「コココ」と「豊住園」で1週間ごとに交互に段ボール箱を郵送し、合計で8週間の制作を行った（Fig. 4 参照）。

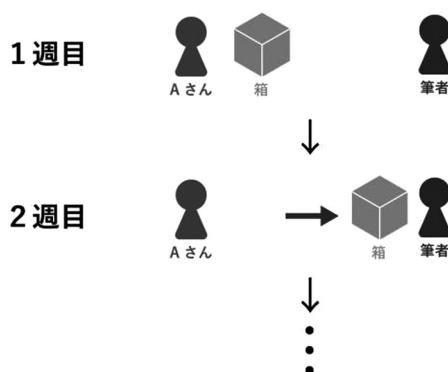


Fig. 4. 制作の進め方

TASC ぎふから筆者へ展覧会への参加の依頼があった際に、「障がいのある人と共同制作をする上で、遠慮をせずに対等な関係を築いて欲しい」といった要望が告げられた。アーティスト側が企画や制作の手法を考えるため、今回の制作を企画した際に「アーティスト」と「福祉施設の利用者」という関係性、または「企画の提案者」と「企画への参加者」という関係性を払拭できずに制作が進んでしまうことを危惧した。そのような中、2020年初頭、世界的な新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により、対面での制作が困難となった。そのことを契機に、「対面せず、見ず知らずの状態でも郵送による共同制作を行う」

という企画を発案した。

(2) 制作プロセスの記録

本資料では、2つの造形作品の内、筆者と豊住園のAさんとの制作を取り上げる。共同制作は最初に筆者側からいくつかの造形素材を送り、他の素材や道具を使っても良いという条件で開始した。1週目はAさんが造形をし、2週目は筆者が造形をするといった順番で制作を行った。制作物の記録をFig. 6～7に、造形物の変化と筆者の所感をTable 1にまとめた。Aさんと筆者の間では明確な言葉のコミュニケーションを取ることができないため、この記録はあくまで筆者側の視点と言葉でまとめたものである。



Fig. 5. 制作前に送った造形素材

(3) Aさんとの対面について

制作終了後、初めてAさんと直接対面することになった。8週目で完成した作品をAさんに渡した時、筆者とAさんとの間で言葉によるコミュニケーションが取れないことが初めてわかった。そしてどのようにコミュニケーションをとって良いか分からず、最終的にAさんに対して言葉がけを行ってしまった。8週間の造形のやりとりの中で、Aさんと共有していた（と筆者が感じていた）イメージやAさんに対する人物像などが筆者の中に生まれていたが、言葉がけをしてしまった瞬間に、造形のやりとりで作られたAさんとの関係が遠いものに感じた。

(4) 制作の振り返り

制作を終えて記録の振り返りやAさんの支援者との振り返りを行った。まずプロジェクトの目標としていた「対等な関係を築く」という点につい

て、互いの造形物にたくさんの干渉が起きたことや、どちらかのアイデアが主導権を握ることがなかったことから、達成できたと感じた。少なくとも筆者は直接対面しないことで「Aさんの造形を支援する立場」や「Aさんのアイデアを中心に制作する立場」となることを避けることができたと考える。

また、Aさんとの関係性について、造形物のやりとりの中でAさんと筆者の関係性は確かに存在していたと考える。少なくとも筆者の視点では、Aさんの造形に対して自分の好きな素材や手法だけでは通用しなくなったと考え、Aさんの造形に触発されて自身の使用する素材や手法に次々と変化があった。Aさんの支援者の方と制作の振り返りをした際には、Aさんは普段、制作1週目に行った「紙を破る」という造形行為をしていたが、制作が進むにつれ、普段使用しない絵の具や他の造形手法を思いつくという変化があったことがわかった。Aさんがどれだけ他者（筆者の存在）を意識し理解していたかについては、明確な感想を聞くことができないため知り得ないが、少なくとも筆者の造形物から何らかの触発を受け、行動に変化があったと記録から推測ができる。



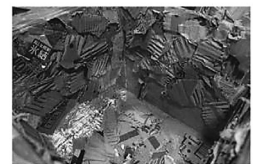
1 週目 制作者：A さん



2 週目 制作者：筆者



3 週目 制作者：A さん



4 週目 制作者：筆者

Fig. 6. 制作のプロセスごとの記録写真 その1



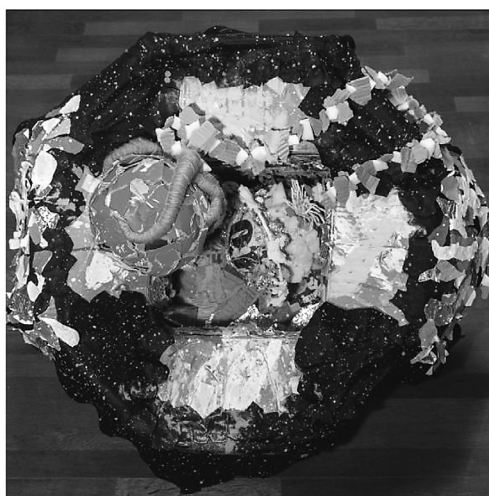
5 週目 制作者：A さん



6 週目 制作者：筆者



7 週目 制作者：A さん



8 週目 制作者：筆者

Fig. 7. 制作のプロセスごとの記録写真 その2

Table1 主な造形物の変化と筆者の所感

週・制作者	主な造形物の変化	筆者の所感
1 週目・A さん	<ul style="list-style-type: none"> ・手でちぎった素材の破片(段ボール、紙、メラミンスポンジ)が大量に箱の中に入っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・想定よりも作業量と物量が多いと感じた。 ・造形物を見て相手の感情を知りたくなった。取り組みに対してネガティブなのかポジティブなのかを読み取れず不安を覚えた。
2 週目・筆者	<ul style="list-style-type: none"> ・破片を色別に仕分け、接着剤で「白色の球体」と「オレンジ色の球体」として固め、特に固定せずに箱に入れた。 ・球体に使用していない破片は箱に入れたままの状態にした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙やスポンジの破片から土や砂といった印象を持ち、泥団子のイメージで球体状の造形物を作った。 ・序盤の週で箱のスペースを埋めてしまうことに抵抗を覚えつつも、相手の作業量と同量の作業をしようと考えた。
3 週目・A さん	<ul style="list-style-type: none"> ・球体以外の破片が箱の内部に貼り付けられていた。 ・それぞれの球体に装飾のようなものが増えた。オレンジ色の球体には無造作に水色の毛糸が、白色の球体に丸めたアルミホイルが円状に貼られていた。 ・オレンジ色の球体のみ、箱の上部から麻紐で吊るされ、箱の底面に置かれた白色の球体と対象になるような配置がされた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1 週目の素材を千切るという破壊的な造形行為から一転し、丁寧に破片を貼り付けるという造形を見て、相手のイメージがより掴めなくなった。 ・自分が作った造形物に対するリアクションがあり、素直に嬉しい気持ちになった。そのリアクションから相手がポジティブに取り組んでいるように感じ、こちらも相手の造形にできるだけリアクションをする方向で制作をしようと考えた。
4 週目・筆者	<ul style="list-style-type: none"> ・箱の中に貼られた破片の隙間を埋める様に、青いテープやアルミホイルを箱の内部に貼った。 ・球体に装飾の続きを作るイメージで造形を足した。オレンジ色の球体についた無造作な毛糸を巻いて整えた。白色の球体に針金と白い紐で作った輪を足した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・オレンジ色の球体を完全に固定しないことで、A さんが球体に可動性を持たせようとしていると想像し、宇宙を移動する天球の様な印象を受けた。 ・球体に足された装飾を見て、白色の球体は無彩色、オレンジ色の球体は有彩色という規則があるように感じ、その規則を踏襲し装飾を足した。
5 週目・A さん	<ul style="list-style-type: none"> ・箱の蓋を延長するように黒いフェルトが足された。フェルトにはちぎった色紙が散りばめられていた。 ・白色の球体に穴が空いていて、ガムテープで印がつけられていた。 ・建築物のような造形物が 2 つ(お菓子の空き箱を三角錐にしたもの、紙粘土にペンで色が塗られたもの)が置かれていた。建築物にも布ガムテープで印がつけられていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・布ガムテープの印に明らかな意図あることを感じた。しかし意図が読み取れず、また 2 つの対照的に配置していく流れだと思っていたため、固定されていない 2 つの建築物が異物のように感じた。 ※後日支援者の方から、2 つの建築物と白色の球体を連結させ、タワーのようにする仕組みを作っていた様子で、布ガムテープは連結のための印だったと伝えられた。

<p>6週目・筆者</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2つの建築物のようなものを、箱の底面に立てるように固定をした。 ・黒いフェルト部分を拡張するように、箱の全ての蓋に黒いフェルトを付け加えた。蓋と一緒に折り畳むことができ、蓋を開けると傘状に広がる仕掛けにした。 ・白色の球体の穴に白い紐を詰め込んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明確な意図の存在を感じた造形物を見て、初めて相手の造形に干渉したくないと感じた。 ・三角錐がとても丁寧に作られていて、指でちぎる様な造形と幾何学的で丁寧な造形が混在していて、より相手のイメージが分からなくなった。 ・相手の制作から可動性のある造形が好みだと想像し、フェルトを傘状に開くようにした。 ・相手のリアクションを期待し、フェルトには何も装飾をしなかった。
<p>7週目・Aさん</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フェルト一面に絵の具のドリッピングがされていた。 ・2つの球体に絵の具のドリッピングがされていた。 ・白色の球体の裏に赤と水色の毛糸が付け足された。 ・麻紐で吊るされていたオレンジ色の球体が、蓋の部分に接着剤で固定されていた。 ・固定した2つの建築物が外されていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者が追加した黒いフェルト一面に絵の具がついていて、嬉しい気持ちになった。絵の具の模様から、漠然と「宇宙」の様なテーマが共有されている気がした。 ・白色の球体に赤や青の絵の具がついていて、「白色の球体は無彩色」という規則が無くなった。 ・オレンジの球体が蓋に固定されている様子から、蓋の開閉時に動くように変えたのではと想像した。 ・2つの建築物が外されたことから、やはり明確な意図があり、そして自分が意図と違うことをしたことがわかった。
<p>8週目・筆者</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1週目にAさんが作ったものを模した段ボールとスポンジの破片を作り、それをローブ状にして2つの天球を繋げた。 ・フェルトの絵の具の周りに糸で装飾を増やした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・8週目までに球体や建築物を固定しようと考えていたが、「可動性」というテーマが生まれている様に感じ、球体や建築物の固定をしなかった。 ・2つの建築物については改めて明確な意図を感じたが、読み取れず特に何も触れなかった。

3. 2021年「そうぞうのパッケージ2」の記録

(1) プロジェクトについて

前回のプロジェクトから、直接対面しない共同制作に、互いの立場や属性の差異を減らしてコミュニケーションをとる手法としての可能性を感じた。また、展示を見たことでこの制作の手法を取り入れる施設や団体が現れた。この手法が他の施設やアートプロジェクトなどに波及していく可能性を考慮し、模倣をしやすいプロジェクトにするために構造の見直しを行った。前回は企画者（筆者）自身が制作をしていたことから、Aさんの様々な素材を使った多様な造形に対する応答が偶然でできていたと考え、使用する素材を少なくするという変更をした。また、1対1で関係性を作っていくことは相手を意識することにかかなりの比重がありハードルがあると感じたため、複数人での共同制作に変更をした。これらのことから、共同制作の方法を、3人で3つの箱を制作し1週間ごとに箱を送り合うようにし、普段それぞれが造形活動に使用している素材を最後まで使用するという形式となった（Fig. 8 参照）。

1 週目



2 週目

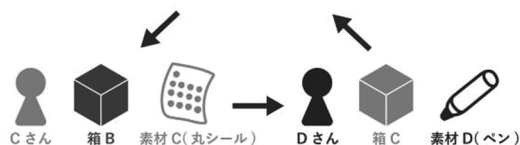


Fig. 8. 制作の進め方

また、今回は「ワークサポートみやこ（社会福祉法人岐阜市社会福祉事業団）」、「各務原市福祉の里あすなろ（社会福祉法人 各務原市社会福祉事業団）」、「障害福祉サービス事業所 ウイングハウス（郡上市社会福祉協議会）」の3つの施設から3人の利用者の方が参加をした。

(2) 制作プロセスの記録

今回は3つの箱があるため、「それぞれの参加者から開始した箱」という区別でFig. 9～11とTable 2を作成した。素材について、Bさんは「段ボールクラフトで虫を作る制作」、Cさんは「丸シールによる平面作品の制作」、Dさんは「紙にペンで思いついた文字を書く」という制作を普段から行っていて、その素材をそのまま使用してもらうことになった。また、筆者は制作者として参加していないため、記録映像や写真、制作後に支援者からの聞き取りをした情報で制作プロセスをまとめた。

(3) 制作の振り返り

制作終了後、Zoomミーティングを使って制作者同士の顔合わせや、支援者との制作の振り返りをする機会があり、ここではその振り返りの中でわかったことをまとめる。

前回の制作と比較し、互いの造形物同士の干渉が少ない結果となった。これは参加者の性格の違いもあったが、前回は筆者（企画者）自身が積極的に干渉していったという違いがあったことが大きな原因として挙げられる。しかし、支援者の話や記録映像を参照すると、互いの造形物を確認し意識している様子があったようだ。例えば、Cさんが丸シールを貼る際、Dさんが書いた文字を避けて貼ったことで、他者への意識があったのではないかと支援者から報告された。

また、数ヶ月後の振り返りでは参加者の制作活動にいくつかの変化があったことがわかった。例として、Bさんはこれまで図鑑を見て正確に虫を作っていたが、Cさんに丸シールを貼られた後の虫を気に入り、自身も丸シールを取り入れたり、図鑑を見た実際の色ではなく想像した色で着色をしたりするようになった。Cさんも丸シールを平面ではなく立体に貼る制作に挑戦したり、Dさんも文字だけでなく絵を描くことが増えたりという変化があった。全てが直接プロジェクトの影響だ

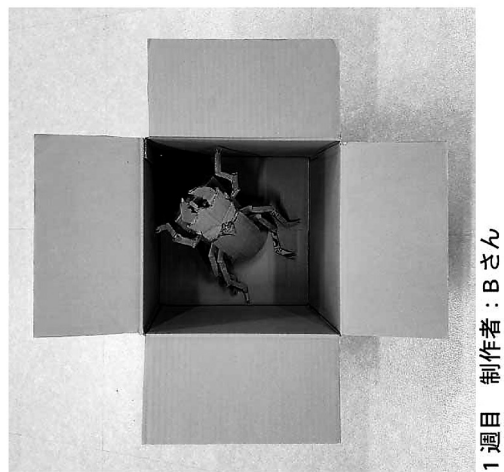
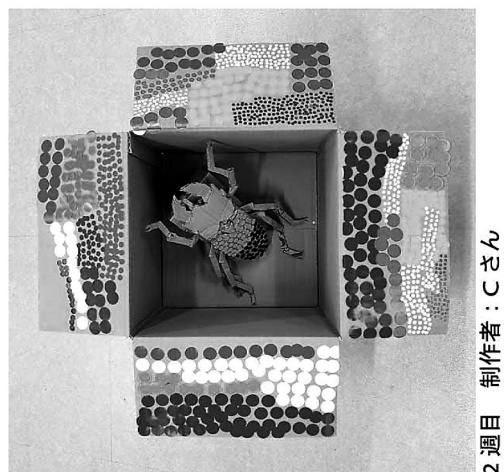
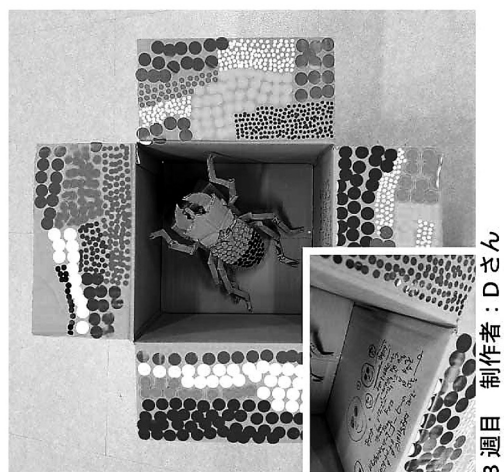
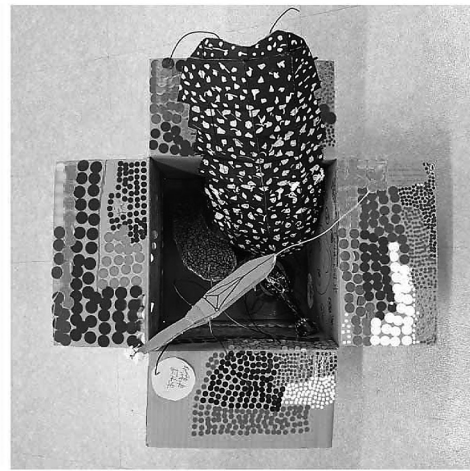


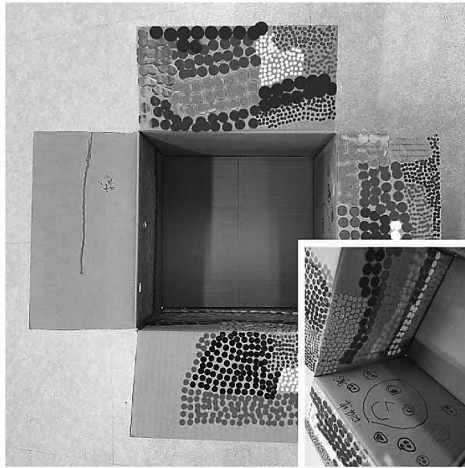
Fig. 9. 制作のプロセスごとの記録写真：① Bさんから開始した箱



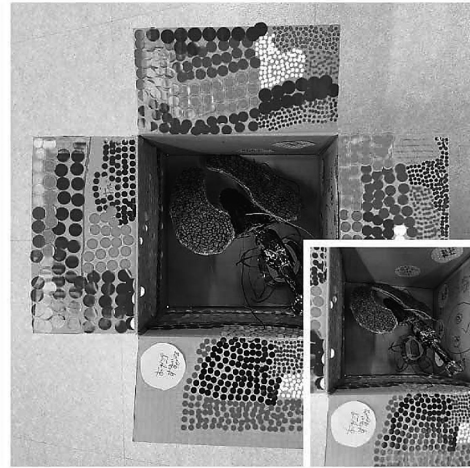
3 週目 制作者：B さん



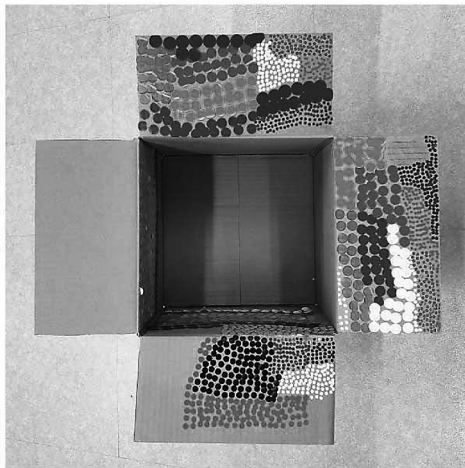
6 週目 制作者：B さん



2 週目 制作者：D さん



5 週目 制作者：D さん

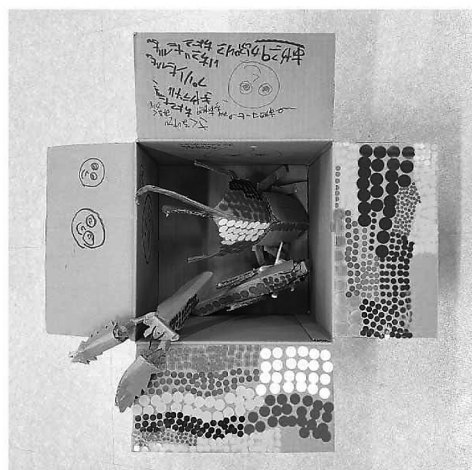


1 週目 制作者：C さん

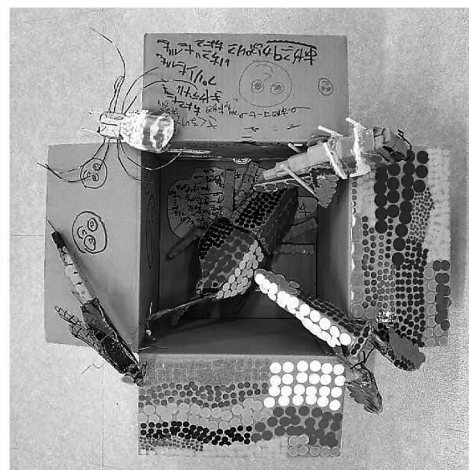


4 週目 制作者：C さん

Fig. 10. 制作のプロセスごとの記録写真：② Cさんから開始した箱



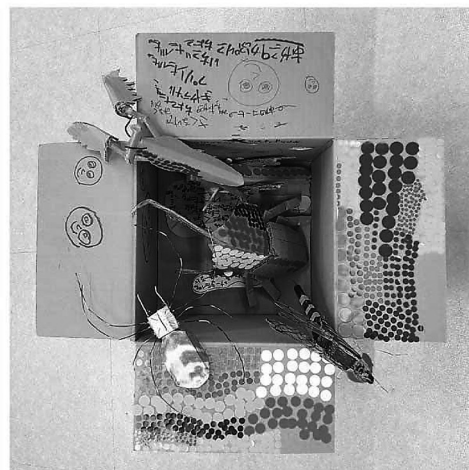
3 週目 制作者：Cさん



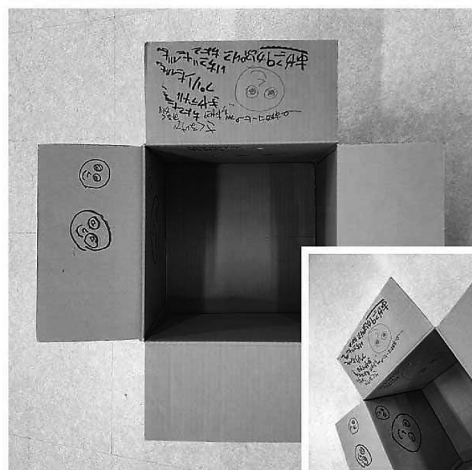
6 週目 制作者：Cさん



2 週目 制作者：Bさん



5 週目 制作者：Bさん



1 週目 制作者：Dさん



4 週目 制作者：Dさん

Fig. 11. 制作のプロセスごとの記録写真：③ Dさんから開始した箱

Table2 主な造形物の変化

	①Bさんから開始した箱	②Cさんから開始した箱	③Dさんから開始した箱
1 週目	制作者：B さん ・段ボールで作ったクワガタムシの造形物が箱に固定された。	制作者：C さん ・箱の蓋と内部の面に丸シールが貼られた。	制作者：D さん ・箱の蓋と内部の面に文字と顔のイラストが描かれた。
2 週目	制作者：C さん ・箱の蓋とクワガタムシの一部に丸シールが貼られた。	制作者：D さん ・箱内部の面に文字と顔のイラストが描かれた。 ・箱の蓋に文字と線が描かれた。	制作者：B さん ・段ボールで作った 3 匹の虫が配置された。
3 週目	制作者：D さん ・箱内部の面に文字、顔のイラスト、線が描かれた。	制作者：B さん ・段ボール、針金、プラスチック板で作られた虫が 2 匹配置された。この虫はあらかじめ彩色されていた。	制作者：C さん ・箱の蓋と 3 匹の虫の一部に丸シールが貼られた。
4 週目	制作者：B さん ・段ボールや針金で作られた虫が追加された。	制作者：C さん ・2 週目に文字と線が足された蓋に、文字と線避けるように丸シールが貼られた。	制作者：D さん ・文字が書かれた紙を楕円状などに切り抜いたものが、箱内部の面に貼られた。
5 週目	制作者：C さん ・2 匹の虫に丸シールが貼られた。 ・箱の蓋の余白と面の一部に丸シールが貼られた。	制作者：D さん ・文字が書かれた色紙を丸く切ったものが蓋と箱内部の面に貼られた。	制作者：B さん ・段ボール、針金、プラスチック板などで作られた虫が 2 匹追加された。あらかじめ彩色されていた。
6 週目	制作者：D さん ・渦状に切られた紙に文字と線が書かれたもの箱内部の面に貼られた。	制作者：B さん ・段ボール、針金などで作られた虫が 2 匹追加された。内 1 匹は彩色されていた。	制作者：C さん ・複数の虫に丸シールが貼られた。彩色された虫の一部にも丸シールが貼られた。

とは判断できないが、今回の共同制作でも「他者の造形物に触発される」という現象が見受けられた。また、直接対面しない制作の仕組みについては、特に他者の影響を受けやすい人にとって、遠慮をせず自分の表現をするために重要であり、必要な仕組みだという意見が多かった。

反省点の 1 つとして、参加者によっては互いの造形に干渉するために慣れが必要で、6 週間という期間が短いという意見が多く挙がった。また、3 つの箱があることが混乱する要因となり、1 つの箱を一定期間作するという方がいいのではないかという意見もあった。

4. まとめ

以上、2年間に渡り行った直接対面しない共同制作の実践記録をまとめてきた。対面しない共同制作は、特性や肩書きといった個人の属性に捉われずに誰かと関わりを持つことへの可能性を示した。従来の造形ワークショップでは、同じ時間と空間の中で共同制作を行うため、参加者のモチベーションに差異が生まれると制作が滞ることや、1人の意見に偏るなど参加者全員のアイディアが発揮されないなどの問題点があった。しかし、今回のように郵送を活用し時間と空間を切り離して制作をすることで、特に他者とのコミュニケーションが得意ではない人や、同じ空間にいる人の影響を受けやすい人が参加しやすいことが実践からわかった。また、言語によるコミュニケーションが難しい人にとって、アイディアや考えを掛け合わせていくような活動は一定のハードルがある。しかし共同制作の体験には、自身が生み出したものに対し他者からリアクションをもらい、他者の制作物から触発され自分の活動に変化が生まれることがある。他者とのコミュニケーションが苦手であったり困難であったりする人にとって、共同制作に参加することにはこのような意義があり、今回の手法を活用することで共同的な活動のハードルを下げる可以考虑。今後も期間や人数、制作物の数などプロジェクトの構造を見直し、実践を続けていきたい。

5. 謝辞

本プロジェクトの制作に参加していただいた豊住園、ワークサポートみやこ、ウイングハウス、各務原市福祉の里あすなろの制作者および支援者の皆様、展覧会を主催していただいたTASCぎふ様、記録の撮影と図版の提供をしていただいたTERAMAKI様に深く感謝し、お礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 岐阜県障がい者芸術文化支援センター（TASCぎふ）. 岐阜県障がい者芸術文化支援センター令和2年度報告書. 2021.

展覧会情報

【2020年】

TASCぎふコラボ展 vol.6「そうぞうのパッケージ」

ジ」

出展者：

豊住園×コココ（野呂祐人・工藤恵美）

TERAMAKI（記録映像）

開催日：2020年10月8日（木）から 10月25日（日）まで 9:00～17:00

場所：ぎふ清流文化プラザ1F 文化芸術県民ギャラリー

【2021年】

TASCぎふコラボ展 vol.7 「そうぞうのパッケージ2」

出展者：ワークサポートみやこ×ウイングハウス
×各務原市福祉の里あすなろ

TERAMAKI（記録映像）

監修：コココ（野呂祐人・工藤恵美）

開催日：2021年10月1日（金）から 10月24日（日）まで 9:00～17:00

場所：ぎふ清流文化プラザ1F 文化芸術県民ギャラリー

